

作品タイトル： 『メイメイ』

著者名： 淡島あわい（あわしま・あわい）

あらすじ： 栗山自然公園のマスコットキャラクター・メイメイは、今日も子どもたちに恐れられている。困った職員たちは、可憐な容姿の新生メイメイを製作する。新生メイメイは人気を博し、子どもたちのアイドルとなる。安堵する職員。が、会場の暗がり、あのメイメイが佇んでいるのを見つける。

特記事項： 特になし

本編の文字数： 3745 文字

そもそも可愛らしくすることが無理だった。メイメイはどこからかもらってきたトナカイの着ぐるみを、改造して仕立てたものだったから。

「俺、もう嫌っすよ。暑いし重いし、子どもには泣かれるし」

扮して三か月、バイトの西崎君はメイメイの中に入るのを渋り始めた。

「でも、一応は呼び物なんですよ。ほら最近、ゆるキャラが注目されているでしょ。うちのゆるキャラなんですよ、メイメイは」

「全然ゆるくないっすよ！」

彼が職員の増田さんに反発するのも、もっともだった。

何せメイメイは身長が二メートルもあるのだ。「威圧感がある」という不評に拍車をかけるのは、深くかぶった黒い帽子や、帽子に隠れてよく見えない目だった。

来園者を見下すうつろな瞳は焦点が定まらず、それなのに肥大な耳を揺らして進んでくるのだから、大人でさえも後ずさりする。

まして子どもに至っては、真っ青になって逃げ惑い、イベントが開かれる度に必ず何人か泣いた。

つぎはぎのある茶色い毛皮は、不潔な感じがして人を遠ざける。帽子の両わきから生えた長い耳は垂れ下がり、手芸の得意でない人が担当したのだろう、中身の綿がはみ出している。はめられた手袋はボクシング・グローブのようで、凶暴な感じが否めない。

極めつけには股下が深い造りのため、人間と野獣のキメラの失敗作という、哀れな生い立ちまで想起させた。

油断ならない瞳といい、攻撃的な前歯といい、なぜわざわざこんな形をこの世に生み出

したのか分からない。一見しただけでは、どういう種類の生き物に分類すれば良いのか、判断できない。

それだから、「来園者感想記入用紙」に同じ質問が絶えないのだ。

Q、あのキグルミは何の動物ですか。

A、栗山自然公園のマスコットキャラクター、ウサギのメイメイです。

この質問数が二桁に達したとき、遂に増田さんにも自信がなくなった。

果たしてメイメイはウサギなのだろうか。一体誰が認めれば、メイメイはウサギになれるのだろうか。

「子どもに泣き叫ばれるゆるキャラってありえないっすよ。何でこんなにクオリティー低いんですか」

メイメイの毛皮に足を通しながら、西崎君はブツブツとこぼした。ハリのないボア地は思うように形を定めず、さっきから悪戦苦闘している。ようやく身につけても、着心地は最悪だ。歴代のバイトの汗がしみ込んでいて、皮と肌が接する感触には鳥肌が立つ。

「仕方なかったんです。開園当時は予算が足りなくて、丁度、いらぬ着ぐるみがあるってところからもらってきて、職員自ら作ったんですから。なんとかウサギっぽくしようとはしたんですけどね」

「でも、こういうのは可愛くないと生き残れないんすよ」

増田さんの弁解に如才なく切り返すと、覚悟を決めて不気味な頭を手にとった。ええいままよとかぶせた途端、身体が軸が大きくぶれて、ウサギ首はあらぬ方向へ回る。

「まあ、やっと新しい着ぐるみが出来たんです。今度はちゃんと業者に頼みましたからね、可愛いですよ。だから、もう少しの辛抱です」

言いつつ、被り物の向きを直してやり、景気づけにポンとたたく。安物の毛皮はハラハラとはがれて手に着いた。

よろめきながら控え室を出て行くメイメイを送り出した後、増田さんはお手洗いへ直行し、念入りに手を洗った。

そしてその日もメイメイは、大人に避けられ、子どもに泣かれ、散々迫害された挙句、わずか十五分で会場を追い出されたのだ。

「俺、もう絶対入らないから！」

戻るや否や、西崎君はメイメイを脱ぎ捨て、力任せにロッカーに放った。

ハリのない毛皮は軽い音を立てて形を崩した。重い頭は扉に耳を挟んだ。カッカとして出て行くバイトを、増田さんが追い、なだめすかす。控え室は無人となって、照明が落とされた。

狭いアルミの箱の中。首と胴体の離れたメイメイは、床に鼻先を押しつけ、うつろに目を開く。子どもの恐怖の表情が焼きついた、おぞましくて悲しい瞳だった。

が、その悲哀さえも、帽子に隠れてよく見えない。

新しい着ぐるみには川上さんが入った。小柄で背が低めの、女子大学生のバイトだ。

本当は新生メイメイにも西崎君に入ってもらおうつもりが、この忙しい日に、彼は出勤していないのだ。

しかし、川上さんの体型は、かえって新生メイメイにぴったりだった。

新生メイメイは仔ウサギという設定だ。お腹周りをたっぷりととって、その分、高さは控えめに見える。愛嬌のあるつぶらな瞳に、上質なファーをあしらった、純白でふわふわの毛皮。短く立った両耳の間に丸い帽子をちょこんとのせて、赤い蝶ネクタイは紳士的で信頼できる。ちろりと出た前歯はひょうきんで、茶目っ気を感じさせる。小さな前足は羽のようでもあり、ウサギの仔が一生懸命に二足歩行する様子がいじらしい。

子どもたちは何の気兼ねもなく、生まれ変わったメイメイと触れ合えるのだ。

実際、新生メイメイは大好評だった。イベント会場に現れた真っ白な仔ウサギに、来園者は顔をほころばせた。

「可愛い！」

「きれい！」

と、口々に褒めたたえる。

子どもたちは我勝ちに列をなして、メイメイと写真を撮りたがった。自分の番が来ると、幼い本能に逆らえないのだとばかりに、大きな体に腕を回し、柔らかい毛皮に顔をうずめた。

満面の笑みで見上げる子どもが愛おしくて、川上さんはついサービスしてぴょんぴょん跳ねてみせるものだから、登場後間もなくして、新生メイメイの人気は不動のものとなる。

離れて見ていた増田さんは、目を細めてうなずいた。

キャラクターを幾重にも取り囲むお客。絶えずたかれるカメラのフラッシュ。明るいBGMに、子どもらの歓声。

その中心で光を浴びる、可愛いゆるキャラ。

これでもう、メイメイの素性を疑われることはない。それどころか、この人気ぶりでは近いうちに商品化の要望があるかも知れない。

前途洋々な未来に思いを馳せていた増田さんに、やにわに悪寒が走った。忘れかけていた懐かしい嫌悪感が、背筋を這う。なすすべなく、おもむろに振り返る。

会場の隅、照明の光が当たらぬ陰に、メイメイが立っていた。薄汚れた毛皮をだらりとまとい、例のうつろな瞳で、自分の華々しい後継者を見つめている。

「まずい」

増田さんは口走った。

「西崎君、朝会に出なかったから知らないんだ。ああ、立ち往生してるよ。お客に気づかれる前に引っ込んでくれないと困るな」

急いで説明しに行こうと、足を踏み出す。

が、走り回る男の子に横切られ、その子を追う母親に遮られ、遂にはゆるキャラの取り巻きに巻き込まれてしまった。腰元にぶち当たる小さな頭の群から、どうあがいても抜け出せない。

身動きが取れない中で、顔だけ向けて壁際を見ると、懸念は現実になった。

一人の女の子が端っこのメイメイに気づき、好奇心のままに、人の輪を外れて歩き出したのだ。

「言わんこっちゃない……。遅刻した君が悪いんですよ……」

あの女の子の頬にいつ涙が伝うかと思うと、増田さんの心は痛んだ。

水玉チュニックの背中が、暗がりへと消えて行く。

女の子はメイメイを見上げた。自分の倍以上もあるウサギを、熱心に見つめる。

メイメイは黙然として動かない。中途半端に縫いつけられた両耳が、重たそうにたわむ。

女の子のまぶたが闇路を開く。深い呼吸が空気を揺らす。

ふいに腕を伸ばすと、左足の毛皮を不器用になでた。

「メイメイ」

小さくつぶやいてみる。まだ就学前のまっさらな手のひらで、毛並みに逆らって、ごしごしと押しなでる。二メートルもあるウサギの可愛がり方をよく知らないのだ。

けれども善悪の判断をつけない彼女には、どんなものにも共感する能力が、まだ残っていた。

「かあいそうにね。メイメイはがんばってるよ」

そう言って、くたびれた着ぐるみの労をねぎらう。

メイメイは膝を折って身を縮めた。それでも白いのどを見せる女の子のため、さらにひざまずいて、同じ視線に下がる。こうすると隠れがちの瞳もよく見えて、案外誠実そうだと分かる。

「メイメイ」

今度は歌うように口に出してみた。少し楽しくなって、ほほ笑みかける。

メイメイは手袋をはめた手で、優しくおかつぱ頭をたたいた。女の子は声を上げて笑う。腕を頭の上にもっていき、メイメイの手袋に自分の手を重ねた。

もし以前からメイメイが、このように子どもと仲良くできたのなら、あるいは新型を必要としなかったのかも知れない。

やがて、両親が自分を呼ぶ声がある。女の子の耳に、会場の音楽や子どもたちのかん高い声が戻ってくる。

「バイバイ、メイメイ。バイバイ」

別れのしるしに、メイメイの首に腕を回した。きゅう、と抱きしめる。その時に小さな頭を少しかしげ、それからまたにっこりとした。元気いっぱいに駆けて行く。

暗がりにとどまったメイメイは、女の子の後ろ姿に手を振った。バイバイ。

「西崎君、この前のイベントでは、これ着なくて良かったんですよ。あれは新型のお披露目会だったんだから」

増田さんは火かき棒で炎の中のメイメイをつついた。焼却炉の底で、茶色い毛皮が火を上げる。

炉の周りで落ち葉を集めていた西崎君は、雑木林から顔をのぞかせた。

「え？ 俺、その日は休みで家にいましたけど」

慎ましやかな音を立て、帽子の下の目が爆ぜた。石造りの煙突から、細い煙がたなびい

て、秋空に溶ける。

午後の陽光に包まれて、静かに灰になるメイメイ。